

『浜松文芸館』収蔵資料の中から・・・

浜松文芸十人の先駆者紹介 その2

たんぽぽの花のように 美しく清らかにたくましく



《児童劇一筋の演劇人・小百合葉子》

- 1901年 引佐郡都田村滝沢（現浜松市北区滝沢町）に生まれる。本名山下みよる。
- 1918年 浜松実科女学校（現静岡県西遠女子学園）卒業。大阪市役所勤務。
- 1923年 上京。劇団「ネオ」入団。芸名を小百合葉子とつける。
- 1929年 坪内逍遙の弟子となり、児童演劇の道に入る。

- 1945年 終戦。水品春樹らと「信濃芸術座」結成。
- 1946年 信濃芸術座を「劇団たんぽぽ」に改組。
- 1947年 篠ノ井劇場で「そら豆の煮えるまで」旗揚げ公演。
- 1953年 浜松市元魚町へ道場を新築移転。
- 1956年 オート三輪車による浜組・松組の二班の公演活動を開始。
- 1967年 明治百年女優祭で表彰。藍綬褒章を受賞。
- 1981年 浜松市勢功労者として市長表彰を受ける。
- 1982年 中日新聞社会功労者賞、勲四等瑞宝章を受賞
- 1986年 急逝



スズキコージの絵本原画と

浜松の手づくり絵本展



企画展 開催中

10月25日(日)まで

井上靖と浜松 15

「満ちて来る潮」に描かれた佐久間ダム

「満ちて来る潮」は、昭和30年9月から翌年5月まで「毎日新聞」朝刊に連載された。挿絵は行動美術協会の生沢朗である。連載に先立って靖は次のように述べている。

私は河口に立って潮の満ちて来るのを見るのが好きです。どんな小さいすき間をも見逃さず、しかもそれとわかるはっきりした形は取らないで、潮がひたひたと辺り一面を充たして来るところは一種壮大な感じですが。(略)こんどの小説では作者は一人の若い女主人公を人生の河口に立たせてみるつもりです。彼女は自分をめがけて押し寄せて来るものをはっきりと見るに違いありません。願わくばその時、彼女の周囲に寄せる潮が悲しみであれ、悦びであれ、彼女にとって壮大なものであってほしいといま作者は念願するばかりです。

靖はこの小説を書き出す少し前、大阪商工会議所会頭だった遠縁の杉道助に誘われて佐久間ダムの工事現場を訪ね一泊している。「あした来る人」の梶大助のモデルである。

3月31日の朝のつばめで東京を発ち、正午頃浜松に着き、クルマで天竜川の岸に沿って佐久間へ、夕刻工事現場に着いた。その日はダム手前の流静倶楽部に宿泊、翌日工事現場を案内してもらった。「自作解題」に靖は次のように記している。

「満ちて来る潮」に登場する主要人物の一人を、佐久間ダムの設計者にしようと考えたのは、帰りの汽車の中であった。それまでいかなる人物を書くか全然決まっていなかったが、佐久間ダム見学のお蔭で、小説の大切な部分が何となく固まって来た感じであった。(略)最後の場面は、この時の佐久間ダムの見学を、そのまま使っている。小説を書いている間に、二回ほど佐久間ダムを訪ねているが、いずれも公工事に関する取材のためで、天竜川に沿ってのドライブや、工事場から受けた印象は、杉氏と一緒にだった最初の佐久間見学の折のものである。

小説は静岡市の酒場から始まる。そのバーですっかり持ち金をはたいてしまったダム建設の技師紺野が、清水の親戚で汽車賃を借りようと、月明の久能街道をタクシーで行く途中、エンジンの故障で困っているヒロイン苑子と出会う。

皎皎たる名月である。十間ほど続いている砂浜の向こうに、月光に輝いた夜の駿河湾が広がっている。(略)その時、浜の方へ視線を投げた紺野は、二十メートルほど離れた地点に、月を仰いで立っている和服の女の姿を見た。女は月光を浴びていつまでも、背を見せたまま浜に立っていた。

作品の舞台は東京を除けばすべて静岡県内である。靖が佐久間ダムへ杉道助と出かけた少し前の、昭和30年の1月末から2月にかけて「作家故郷に行く」(『小説新潮』)の企画で、弁天島に1泊。焼津港、浅間神社・登呂遺跡などを見て久能街道を通り、興津の水口屋旅館(現在鈴与研修センター)に泊まっている。井上靖は、久能街道での運命的な出会い、佐久間ダムでの別れ、興津の宿での苑子の自殺未遂と小説の節目節目に見聞を活かして場面設定している。こうして書かれた「満ちて来る潮」は、まことに詩情ゆたかな美しい恋愛長編小説である。